

極的に口寄せをしてもらう立場にあり、その体験談に多くの頁が割かれるという特徴が確認された。すなわち、本書が「イタコ」の「利用主体」として想定しているのは、他でもなく言説の「語り手」自身であり、ここには「他者」から「我々」へという、「イタコ」の「担い手」の変化を見て取る事が出来る。

また、本書が「口寄せの体験」において最も重視するのは、口寄せの内容の「当否」についてであり、この点からは、「オカルト」という枠組みが「イタコ」を「死者を憑依させる」という「宗教性」の観点から価値付けるものであることが分かる。したがって、「オカルト」としての「イタコ」とは、その「宗教性」の「担い手」を「我々」と規定する点で、イタコの有する「宗教性」の大衆化をもたらしたと述べる事が出来るだろう。確かに、「イタコ」は六〇年代の時点で一定の認知を得ていた。しかし、「担い手」と「宗教性」を大衆に開いたということからすれば、七〇年代のオカルトブームこそが、大衆文化としての「イタコ」の浸透・定着における一つの重要なターニングポイントだったのではないだろうか。

宗教者の性格と役割について

佐藤 憲昭

釜石市のシャーマニズムは、現在、その中心であるカミサン(シャーマン)が減少すると共に高齢化のため、住民はカミサンに代わり、他地域のオガミヤや日蓮宗僧侶に依頼をするという「シャーマン―依頼者」関係を見せている。こうした宗教者は三種を数える。

第一は、釜石市近在のオガミヤで、一人存在する。彼の呪術―宗教的性格は、神霊を身体に付着させたり、あるいは神霊の姿や声を目・耳にしたりして、神意を伝える予言者型を示す点にある。同時にまた、巫女とコンビを組み、神霊を目にしながら操作する精霊統御者型として、憑祈禱形式において儀礼を執行している。この儀礼で注目されるのは、霊媒の役割を担当する巫女が、自己の身体に憑入している神霊に連れられて、魂が身体から離脱し、依頼要件に関係する遠方の場所(例えば、東京)まで飛んで行き、事実を確認して帰って来るといった脱魂状態を介しながら、儀礼を展開している点である。この儀礼においてホトケオロシも行っている。

第二は、釜石市周辺及び岩手県南部に所在する日蓮宗寺院の僧侶であり、三人存在する。彼らに共通している呪術―宗教的性格は、予言者型を見せている点にある。ある僧侶は、寄台(霊媒)とコンビを組んで寄加持と称する憑祈禱形式の儀礼を執行し、精霊統御者型を示している。また、別の僧侶はホトケオロシを執行しているが、彼は、自己の身体に憑入したホトケが、自らの口で語る内容を半分くらいは理解できるとのことであるから、彼は霊媒型と予言者型との複合型を示しているといえよう。

第三は、釜石市及びその周辺と岩手県南部に所在する日蓮宗寺院の住職であるが、特に霊断師の資格を有している僧侶であり、三人存在する。そのうちの一人は、シャーマニクな性格を発揮しているので、彼を第二の宗教者の枠に入れると、霊断師は二人となる。この霊断師とは、人間の意識の裏側にある第

九識(阿摩羅識)という霊の世界を解説する方法を用いて、依頼者に回答を与える宗教者である、と僧侶たちは説明する。

右の六人が、カミサンに代わって役割を担当している宗教者であるが、問題は、彼らがシャーマンに該当するかどうかである。

第一のオガミヤと第二の僧侶は、双方とも役割を果たす際に、神霊と直接交流をする性格を具えているので、彼らをシャーマンの宗教者と位置づけることが可能である。ふつう僧侶は「通常意識において、人間・社会を代表し、霊的存在に対して一方的に働きかける宗教者」と規定されるプリーストとして位置づけられるが、右の僧侶はシャーマンの性格も具えており、「シャーマンのプリースト」と呼ばれる存在である。ところが、第三の霊断師は、役割の上から見れば、シャーマンと変わりはないが、彼らは「通常意識において、呪力・霊力を具体的に利用して現実的問題を解決しようとする宗教者」であるマジシャンの性格を有してはいるが、シャーマンの性格は見られない。とするならば、第一と第二の宗教者がシャーマニズムの中心ということになる。だが、現実の姿は、霊断師が複合化した形で展開している点に注目しておきたい。

プリースト、シャーマン、マジシャンの三者は、儀礼的役割を果たす際に見せている霊的存在との関わり方を基準として類別された理念型であり、現実型は、言うまでもなくその性格が、多かれ少なかれ、混じり合って現れている。右のシャーマンであると共に霊断師でもある宗教者の本務が、プリーストとしての僧侶である、というのはその例である。最近の研究成果

には、マジシャンの概念にシャーマンを含めている見解が見られるが、理念的には両者を区別した方が生産的であると、筆者は考えている。

幽霊能における告白——その類型と機能——

今泉 隆裕

そもそも幽霊能は、諸国一見の僧(ワキ)の前に、幽霊(シテ)が姿を見せ、土地の伝説、あるいは生前の身の上を語り、僧との問答もあるが、大半は幽霊の告白で、幽霊は死後、地獄に堕ち苦しんでいることを語り、その罪障を懺悔する。そこで僧は引導を渡して、幽霊をその苦患から解放する、という筋立である。その配役は、シテを幽霊(死者)、ワキを僧とするものがほとんどで、その意味において、かなり類型化されているといえる。こうした能は一般的には「夢幻能」というが、その構成の共通性から協能(神能)を含むことがあり、神をシテとするものと、幽霊をシテとするものを区別したいと考える。そこで一般的ではないが、夢幻能で幽霊を主人公とする作品に「幽霊能」の語を用いている。今回の発表では幽霊能における告白の機能について若干の考察と展望を述べた。このことは能における幽霊が怖くない原因を説明することにもなる。

幽霊能における告白はすべて懺悔型式である。巷間では祟ると考えられる非業の死者をシテとして登場させたとしても、幽霊能では「恨み」「怨念」という対象をもつ感情表現はあえてさけ、死者を仏教的世界観の中に対置し、生前のおこないを否定的に解釈(評価)させる。そのため「悔いる」「惜しむ」「執